

おぼろいいてうを記念する会ニエース

らいてうとお酒

櫛田 ふき



一九七〇年の初秋だった。代々木病院に入院中のらいてうが、まだベッドからおりてサイドテーブルで食事をとっていたある夕飯の時のことだった。私はお肴の骨を取り除いたり、お浸しにおしよゆをかけたり、手伝っていたら、先生はいたずらっ子のような微笑みを見せながら、そつと大関の一升びんを取り出し、小さいお盃でうれしそうにチビリチビリ



口にされた。私は先生がお酒をたしなまれるのを初めて知った。

「おいしい？お好きなんですね」「あなたもどう？」「私はアルコールはニガテ」「私だって二、三杯だけよ」

時も時、病室のドアが静かに開いて、佐藤猛夫先生（院長）がご回診どきでもないのに見舞いに来られ、私たちを見て「お楽しみですね。お邪魔しました」とニコニコ笑って去られた。

「酒は百薬の長」ともいう。新春には私も盃をあげよう。（世話人代表）

はじめての出会い

小松 とき

私がらいてう先生にはじめてお目にかかったのは、一九六二年、軍縮のための世界婦人会議（ウイーンで開催）代表歓迎会の時でした。私は兵庫代表を同伴して上京したのですが、永年憧れと尊敬の

的だったららいてう先生に直々お目にかかれるとは何という幸運かと、胸の高鳴るのを覚えたものです。



先生は私の想像どおりの端正なお姿の中に昨日の友のような親しさを見せ、私が同伴して来た兵庫代表、中本千恵子さんが被差別部落出身として学歴の低い嘆きを訴えられた時、「何も卑下することはありませんよ、素直にありのままのお話をなされればいいですよ」と励まして下さいました。中本さんは先生のお言葉に確信をもって素朴な中にも感動的な報告をし、大会代表の一人として立派に責任を果たされました。

帰国後、報告活動のさ中に交通事故で亡くなりましたが、らいてう先生の一言が彼女の最期を飾るどんなに大きな贈りものになったことか、いつまで経っても忘れられない、らいてう先生との出会いです。（兵庫県婦人運動史研究会代表）



高群逸枝さん

子など十四人が集まって結成。機関誌『婦人戦線』は三月号から発行されました。「発行兼編輯印刷人 高群逸枝」となっていました。夫の橋本憲三が編集事務など一切を引き上げていました。「橋本さんの思いつきで始めて、何にでも口出しされて、高群さんも亭主のいなりになってる、そんな会でしたから、どうも自分たちの会という気がしませんでした。らいてうさんも会合に出てきて、ほとんど発言しませんでした。リーダー格なのに、高群さんに一歩ゆずって立てているという様子でしたよ」らいてう自伝には「高群逸枝さんほどわたくしを惹きつけたひとはありません。ただもう無性に好きなひとでした」とあります。しかし「高群さんのもつ思想そのものに打ち込んだわけではありません

せん」とも書いています。「そうでしょうね。連盟に集まってきた人たちはみんなアナキストとしても半端でしたしね。それに『婦人戦線』はあぶない路線で一般受けしないものでした。らいてうさんは、『婦人戦線』を第二の『青鞥』である（『婦人戦線』に参加して）と書いていながら、寄稿したのは二回ほどでした。自分の思う方向と少しちがう路線で話し合われるのを黙って聞いていて、じーっと考えて、後ろからゆっくり来るといふ感じでしたよ」『婦人戦線』は、男性文化を全面否定し、強権主義を排して、自由と自治の社会をめざしていました。「私は農村主体の社会構造を考えていたので、小説や評論を載せてはいましたが、肌に合わないものを感じていま



らいてうさん(1931年頃)

た。みんなインテリでプチブルで、労働の経験がない。どことなく差別感覚があって、お互いに批判ばかりしている。こんなことでは女の結束―婦人戦線は成り立たぬと思っていました。必然のように解体しましたね。男性文化は女を卑屈にする攻撃して、新しい母性文化の創造をといながら、子どもを育てている人がいない。子どもなんか産んでいて運動できるかということなんです。私は二代も三代もかけて生活にそくした運動を展開しなければ効果はないと思っていましたから、さびしいことでした」『婦人戦線』は翌一九三二（昭和六）年六月、第十六号で終刊となり、高群逸枝は研究生活に入ります。「らいてうさんは高群さんの詩を絶賛していたんだけど、この詩、どう思いますか？『汝洪水の上に座す 神工ホバ 吾日月の上に座す 詩人逸枝』 知らない？ 有名な詩ですよ。『日月の上に』という自伝的長詩の序詩。男性文化の最高の権威と対決するという宣言なんですよ。けれど、神様だの仏様だのが出てくるようじゃ、いただけませんねえ」

新春インタビュー

らいてうさんと「婦人戦線」の頃

作家 住井すゑさんを訪ねて

今年一月七日で九十五歳になる作家、住井すゑさんを茨城県牛久沼のほとりにお訪ねしました。

「自分の誕生日を確実に知っている人なんて、一人もないはずなんです。でも、住井さんが『あなたはこの日に生まれたんだよ』という



21歳の住井さん(1923年)

から、そうか、と思うだけでしょう」というのが住井さんの「誕生日なんか祝わない理由」です。さらに「努力してトシとったわけじゃない」とつづきます。八年前の誕生日、一月七日に昭和天皇が死去。その前後のマスコミあげての大騒ぎにあきれ果て、どうしても『橋のない川』第七部を書かねばとペンをとり、一九九二年、九十歳の夏に書きあげました。第一部の刊行が一九六一年、三十年以上も書き継いできたわけです。第七部には大正天皇の死去をめぐる悲喜劇も書

き込まれ、昭和三年で終わっています。今はペンを休めて悠々自適です。「記憶もだんだん薄れてきたけれど、らいてうさんのことはよく覚えていますよ。昭和五年に高群逸枝さんを中心に結成された『無産婦人芸術連盟』のメンバーに私も加わりましたから、その会合でよく会いました。会場はいつも高群さんの家で、らいてうさんはまさに「はきだめに鶴」でしたよ。高群さんの家は殺風景でしたし、あのかたの化粧がまた、ぎよつとするようなものでしたからね。らいてうさんは座禅をしていたせいか、座っている恰好が上品で端然としていて美しい。なるほど、らいてう、らいてうと世間が騒ぐわけだと納得しました。それでいて子どもの扱いも手なれていて、私が背負っていった子どもを肩からおろそうとすると、気軽に手伝って下さる。ほかの人はだれもそんなことはしてくれない。子連れは私一人で、まるで子どもを生まない連盟のようでしたからね」無産婦人芸術連盟は、一九三〇（昭和五）年一月二十六日、高群逸枝、平塚らいてう、住井すゑ、城しずか、望月百合

らいてうと『女人芸術』

折井 美耶子

一九九六年十月十日から十一月二十四日まで世田谷文学館で、「『青鞥』と『女人芸術』」時代をつくった女性たち展」が開かれていた。岸田俊子から始まる青鞥前史も含めて、明治、大正、昭和前期に文筆で活躍した女性たちを網羅したような華やかな企画で、大勢の来館者があったという。

一九二八年、女性のための文芸誌『女人芸術』創刊を思い立った長谷川時雨は、まず生田花世を訪ねて相談をした。時雨にも花世にも、かつての『青鞥』が脳裏にあったことと思われる。『女人芸術』には、らいてうをはじめとして富本一枝、神近市子、今井邦子、小寺菊子などの『青鞥』関係者も参加している。しかし『青鞥』廃刊から『女人芸術』創刊まで約十二年、大正デモクラシーを間にはさんで女性を取り巻く状況は確実に変化していた。『女人芸術』からは、林芙美子など大勢の若き書き手たちが育っていった。らいてうらは第一線というより

も、若い女性たちの成長を見守る立場にあったように思われる。らいてうが『女人芸術』に書いたまとまったものとしては「知識婦人についての考察」くらいである。そして時代の影響のなかで『女人芸術』が次第に政治的な色彩を帯びてくると、主流を占めたマルキシズムを批判して脱退し、アナーキズム系の『婦人戦線』を創刊した高群逸枝に、らいてうは

共感を示していった。一九三〇年『婦人戦線』二号に書いた「婦人戦線に参加して」は当時のらいてうの思想的立場をよく表わしている文章である。らいてうはこの中で「『婦人戦線』は第二『青鞥』である」とまでいっている。らいてうがクロボトキンの「相互扶助論」に影響されて



「相互扶助の精神」による「共同自治の新社会」の建設を理想として、消費組合運動に積極的に参加していった時代でもある。ある。(らいてうを読む会)

「お知らせ」

▼らいてうを記念する会総会

日時 1997年4月5日(予定)

会場 未定

講演 中野邦先生(日本女子大学教授)

「平塚らいてうと母性」

報告 これまでの活動報告と今後の方針

▼らいてう忌記念行事

ゆかりの地・佐久山、塩原バス旅行

日時 97年6月1日～2日(予定)

宿泊 塩原温泉(予定)

※総会、バス旅行の詳細内容は次号で

「事務局日誌」

9月30日 常任世話人会

10月10日～11月24日 「『青鞥』と『女人芸術』展」(世田谷文学館)にらいてう遺品を展示

11月6日 折井美耶子さんの案内で同展の観賞

11月15日 常任世話人会

11月27日 小松ときさん編『登音』出版を祝う会

12月9日 世田谷文学館の、16日に憲政記念館の、らいてう遺品を日本女子大

成瀬記念館(西生田)へ移送